6. 第8回市町村婦人防火クラブ幹部地域研修会にて行われた体験発表（次第）

「安心して暮らせる地域を目指して」

島根県雲南市多久和分館女性防火クラブ　部長　高尾吉子

私の住んでいる雲南市は、島根県出雲部のほぼ中央から奥出雲に位置し、神話と伝説の「八岐の大蛇」で名高い斐伊川の上流部から中流部に沿って市街地が形成された地域であり、「長崎の鐘」「この子を残して」の著者であり「如巳愛人」「平和を」の願いを世界に訴えつづけた故永井　隆博士の生誕の地でもあります。

先生の精神を２１世紀を背負う世代に継承するため「平和」をテーマとする作文や小論文を毎年募集し、優秀作品を世界に発信しています。

さて、私たち多久和分館女性防火クラブは、昭和６１年に消防署から防火クラブ結成の働きかけがあり、自治会・公民館・地元消防団等と協議を重ねてまいりました。

火災の約６割が建物火災であり、死傷者のほとんどが住宅火災で発生していることから、住宅火災を減少させることがいかに重要であるか、また、日頃、家庭での火気を取り扱う機会の多い女性の果たす役割は極めて大きいことから、地域の女性が共同して防火に関する知識を学び、議論し、活動する事が必要であるとの結論に達し、複数の自治会で組織した公民館で女性防火クラブ結成の運びとなりました。

以来、地元消防団・消防署と密接な連絡を取りながら、地域内の防火意識の高揚を図るため、地区の運動会に合わせ、起震車体験及び消火訓練、また、防火クラブ活動では普通救命講習を実施したり、火災予防運動期間中には防火横断幕や懸垂幕を掲げ火災予防を呼びかけ、消防署が行っているひとり暮らしの高齢者宅の査察に同行し、防火相談に乗るなどの活動をしています。

こうした防火活動が認められ、平成２年に財団法人日本消防協会から軽可搬ポンプの交付を受けることができました。

交付頂きました軽可搬ポンプは、クラブ員が毎月交代で放水試験と点検整備を行うことにより、防火意識を高めたり、災害時の即応体制を整えております。

これらの活動を通して、消防署やクラブ員と地域住民のコミュニケーションを図っていくなかで、全国や、雲南地域で住宅火災が多発している現状が話題によく上り、死傷者も多発していることから「火を出さないのが基本ではあるが、万が一火災になったときの被害を最小限に食い止められる方法はないか」という話になり、あるクラブ員から「火災をいち早く知らせる方法はないものか」という話になり、あるクラブ員は「火災をいち早く知らせる機器があれば」という意見が出されました。

消防職員の方から、家庭用の警報器があることを聞き、全戸への設置は出来ないものかと考え説明会を開催していただきました。

その中で、「本当に必要なものか」と反対される人も多数ありましたが、納得のいくまで話し合いを行い、理解をいただき防火・防災に対する重要性を認識して頂き設置することとなりました。その理解をいただくのに１年半かかりました。家庭用とはいえ、高価なものであり、公民館から補助金を出して頂くことにより平成１２年に１３０全戸に設置しました。

こうした火災予防啓発運動を認めていただき、平成９年雲南少年婦人防火委員会優良クラブ表彰、平成１２年島根県少年婦人防火委員会優良クラブ表彰、昨年度は住宅防火対策優良推進組織等団体として消防庁長官表彰を受章しました。

今年度実施した座談会の中で、住宅火災警報器が、義務づけられることになったとの話があり、現在その基準に合致するよう各家庭を廻り、説明をしています。

これからの防火クラブの活動を考えるとき、過疎化が進み最近多発する自然災害に対応するためは、女性だけでは活動が困難になっているのが現状です。

これらの自然災害に対応するため、例えば、地震対応として家具の転倒防止を習得したり、あらゆる災害に対応できるよう男性も参画し組織を拡大していきたいと今考えているところです。
最後になりましたが、私のつたない体験発表を最後までご静聴頂きまして誠にありがとうございました。
島根県奥出雲地方は、四季を通じて親しまれ風光明媚な観光地がたくさんございます。
皆様の旅行計画に神話の古里奥出雲に一度起こし頂ければ幸いに存じます。
ありがとうございました。

▲ このページの上に戻る

「新潟中越地震　その後の婦防の活動」

新潟県小千谷市上ノ山婦人防火クラブ会長　佐藤笑子

今年は空梅雨といわれましたが、今回の水害で被害をうけられた県の方々には心よりお見舞い申し上げます。水は地震よりも恐いと私は考えております。そして、水がひいたあとの泥の片づけは本当に大変だと思います。まして、時期的に食中毒や病気も発生しやすいのでどうかお身体にはくれぐれも気をつけて頑張って下さい。
昨年の10月23日の新潟県中越地震の際には全国の婦人防火クラブの皆様をはじめ、関係者の方には大変大きな声援とお力をいただき、ありがとうございましした。
新潟中越地震からちょうど8ヶ月が経ちました。小千谷では仮説の闘牛場も牛舎も出来ました。そこに市外へ預けていた牛が帰ってきました。牛もほっとしたのでしょう、笑っているように見えました。
それから、小千谷は泳ぐ宝石といわれる錦鯉の産地です。これが地震で親鯉がすべて死んでしまいました。そこで、生産者が何軒かが集まって組合を作りました。親鯉を借りて、そして産卵させ、それがこの前ふ化しました。それぞれのところへ分けて、今、一生懸命育てております。
今、いろいろと頑張っておりまして、あちらこちらで行事やイベントが復活しています。私達も、だんだんと恐ろしかった地震から遠ざかってきています。
しかし、まだ震度2～3の余震は続いています。直下が多いので震度2でも未だにびっくりします。当時は慣れてしまって震度当てをするくらいの余裕がありましたが最近では震度2でも怖いです。
家が傷んでしまって、私が歩くとお客さんが「今、地震がきたよ」と驚くほど傷んでいます。それでも生活しています。
8ヶ月経って、私はやっと山古志村に行ってきました。山古志村も仮道路ができたため、通ることはできますが許可証がなくては入ることができません。
私の友人で山古志村の1番奥の部落に実家がある方がおりまして、そこまで連れていってもらいました。その道中、あちこちから煙がたっているのです。片付けに家に帰っているのです。片づけても今は住むことはできませんが、それでも持ち帰って使える物がないか、と毎日通っているそうです。しかし、5時までには出て下さいと山古志村を出なければなりません。
その中でひとつ嬉しかったことは食堂が1軒開店したことです。壊れた食堂を直して営業を始めたのです。住民はおりませんが、作業している人達がコンビニで冷たい食事を食べていたのが暖かいものが食べられると、大変喜んでいました。その食堂も5時までには閉めなければなりません。夜はまだ住むことができないのです。
山古志村の中の道は非常に細く、何度も落ちると思ったくらいぎりぎりなのです。それも、この28日の大雨が降る前でその状態でしたので、きっと雨が降ったら崩れると思っておりました。28日の大雨で崩れた箇所はやはりたくさんあったそうです。けれども、住んでいる人がいないものですから報

道されないのです。その道もまた徐々に復活してきました。
　よく何ヶ月後の被災者の方といってニュースなどに出る方々が「早く家に帰りたい」と言っている声が聞かれますが私は帰りたくないです。あそこでは生活できないからです。
　若い方も嫌だと言って戻りません。戻りたいと言う方には高齢者の方が多いのですが、高齢者の方々はひとりでは生活することができません。病院や町に買い物に行くにもひとりでは行けないですよね。車に乗せてもらう、バス停までも一山超えなければならない。ましてや、冬になると、すごい雪にみまわれます。帰りたい方の気持ちも分かりますが、私は今のままでは生活できないと思います。
　余談ですが、私達の地域は昔、出稼ぎで男性が町を出た後、女性が地域を守りました。その際にポンプ操法などを習いました。
　しかし、最近は出稼ぎがありません。そうすると、防火クラブという名前から、何をするのだろう、消防署と何かするのか、とよく尋ねられます。そうではなく、まずは婦人会のような仕事をしてもらおうと作ったのが上ノ山婦人防火クラブです。ここの場合は、本当に地域密着型の防火クラブといえます。
　町内の各種団体からいろいろな声がかかれります。豆まきをするから手伝ってとかお祭りで踊ってとか様々な依頼がきます。婦人防火クラブに入っていながら、いろんな人とコミュニケーションがとれて声かけもできるのです。これが、上ノ山婦人防火クラブの一番大事なことだと思っています。
去年の7月13日の大洪水があった時、被災者の方に聞いた話ですが、1階のすべてが水につかり2階に避難したそうです。その家の前に住むおばあさんは１人暮らしでした。
　戸も開かないのでどうしたんだろうと声をかけるのですが、応答がありません。2日目、3日目になって、ようやくおばあさんが戸を開けたので、良かったと安堵されたそうです。そして、ゴムボートでの救出が始まり、そのおばあさんも無事救出されました。
　そのゴムボートでの救出ですが、自分も水があるから動けないため、窓越しにボートを誘導することになります。そのためには、日頃からここにはお年寄りが何人いてこの家はここにある等を把握していなければなりません。この話を聞いて、やはり声かけて、コミュニケーションをとってふれあわなければならないと思いました。
　しかし、それにはひとつ問題があります。私の住む町内には仮設住宅が56個あります。そこで、１人暮らしの男性の方が孤独死したのです。男性は、女性のようになかなかお茶を飲みにいったり出来ないものです。孤独になりやすいと思います。
　しかし、「声かけ」「声かけ」とは言いますが、同性ならは良いですが異性は少し線をひいてしまうことがあります。
　同じ町内の方ならば良いですが、仮設住宅ですと、いろいろな所から入居しているので知らない方も多いのです。
　そして戸を開けて、「ごめんください」と入ると、「あの人はあの家に入っていった」と興味本位に噂する人もいるのです。そういうことで声かけも気楽にどこでも、とはいかないものだと思いしらされました。
　民生委員さんにも聞きましたが、彼らも相手からＳＯＳが出ればいくらでも行けるけれども、そうでないとプライバシーもありますのでなかなか中までは入っていけないそうです。これは大変難しい問題だと思います。誰にでも声をかければいい、というものではないと分かりました。
　余談になりましたが、上ノ山婦人防火クラブは婦人会として立ち上げまして、その後、「いきいきサロン」として、１ヶ月に1回、お茶を飲んだり、高齢者にお昼を作ってあげたり、踊ったり歌ったりして１日楽しんでもらうというイベントを行っています。そのイベントをおこなった10月20日の3日後に地震があったのです。
　私の地域の集会場は3階建てでエレベーターもあります。もし、3階でのイベント中に地震があったら、子供なら並んで避難させられますが高齢者は1人につき1人がついていなければなりません。これではとても大変だと思い、半年イベントを休んで4月に再開しました。皆さん、喜んでました。私もやって良かったなと思いました。
　そして、地域の神社のお祭りは5月の15日におこないます。これも神社の鳥居が壊れたりして危ないからということで中止になりました。

そして、小千谷では2月に風船一揆といって、熱気球をあげるイベントがあるのですが、そこの茶屋を防火クラブが任されていましたがそれも中止になりました。
いろんな大きなイベントが全部中止になっていましたが、ここで8月6日に「復興上ノ山夏祭り」のイベントをやるので手伝ってもらえないかと連絡をいただきました。また、防火法被を着ておこなうと思います。
その時には仮設住宅の皆さんにも声をかけたいと思っています。私達の防火クラブの活動の「いきいきサロン」も復活しましたし、いろんなイベントのお手伝いも始まりました。
そして火の用心も、毎週火曜日の夜8時から9時までの1時間、拍子木をたたきながら町を歩いておこなっています。ちょうど、仮設住宅の中も回るのですが、仮設住宅の方がわざわざ窓を開けて「ご苦労様」と声をかけてくれます。そうされると、思わず目頭が熱くなる思いでいっぱいになります。町の人は戸を閉めて、「いつきたの？」と言う始末です。
仮設住宅の方は、村でのふれあいができているのです。町の人は隣は何をする人ぞ、という感じなのですが、それでは困るのでやはり声をかけようと地震以来、声かけを一生懸命やっております。
それから、この年齢になりますとなかなか新しい方が入ってこない為、後継者に困っています。それが今、ひとつ悩みの種です。それは、これだけがっちりしたクラブに若い方が入るのは難しいからだと思います。
そこで、若いお母さん方が多いＰＴＡのグループがあるのですがその方々に防火とは言わず、行事の手伝いなどをお願いして自然に最後はバトンを渡すような方法を取ろうと考えています。
今はそちらにも目を向け、若返りの防火クラブを作ろうと思っております。
このように防火クラブは地域密着・ふれあい・声かけをぜひしていただいて、地域に、あの人は防火クラブの人だということで声をかけてもらえればいざという時に逆にこちらから声をかけられますし、プラスが多いのではないかと思います。
そういうことで、ぜひ皆さんにも声かけをひとつの運動としてお願いして、その後の上ノ山婦人防火クラブの活動というほどではありませんが、近況として報告させていただきます。どうもありがとうございました。

▲このページの上に戻る

目次

1．さいたま市総合防災訓練（第26回八都県市合同防災訓練）
2．平成17年度北海道・東北ブロック婦人防火クラブ連絡協議会地域幹部研修会
3．平成17年度婦人防火クラブによる新住宅防火対策の推進に関する調査研究会
4．平成17年度秋季全国火災予防運動に対する協力について
5．愛知万博にて防火・防災をＰＲ！（愛知県婦人消防クラブ連絡協議会）
6．第8回市町村婦人防火クラブ幹部地域研修会にて行われた体験発表（次第）
7．栄えある内閣総理大臣表彰を受賞して（千葉県婦人防火クラブ連絡協議会　竹内会長）
8．地方からの便り
9．あなたも危険物取扱者・消防設備士
10．日本防火協会からのお知らせ